

『こびりついたものが、ふきとれて』

公乃まつり

4,267 文字

あらすじ

産休から復帰して、今ドキの働くママデビューをした結衣。かわいいけど一時も目を離せない息子、協力的なのにどこか抜けてる夫との生活に、疲れきった結衣の肌はボロボロに。こうして妻からママになっていくのかな。そんな余裕のない家族の日常に、特別な時間をくれたのは彼だった。

イライラしてくると、ニキビができる。

おでこだったり、頬だったり。

食生活の乱れが加わると、口周りにもできる。

個人差もあるけれど、この赤くて先端が白い、プチっとした出来物に多くの女性は悩まされる。

桜はすっかり葉桜になって、みんなが新しい環境に慣れてくる5月のことだった。緊張が隠してくれていた忙しさは、そのまま疲れになる。

結衣の頬にはニキビができていた。いつぶりのニキビだろうか。結婚式の準備に追われている最中に、仕事で不可抗力な事故が多発していた時期以来かもしれない。そうすると、3年ぶりか。

時計を見ながら、誰と私語をするでもなく、お茶休憩を挟むでもなく、ただひたすらにパソコンに向き合っていた。

あと少し、あと少し。

企画書を打ち込むタイピングは、確実に産休前よりも早くなった。

自然とタイピングの力が強くなる。職場に響かせるキーボードの入力は、本当はあまりよろしくない。でも、今の結衣にそれを気遣う余裕はなかった。

この音で無駄な雑談を排除できるなら、やってやる。

そんな気迫を察してか、強いタイピングの音のせいか、17時を過ぎてからは誰も私に話しかけない。

17時18分。打ち込む音が止まって、パソコンとつながっているコピー機の音が響き始めた。結衣は机上の書類整理を始めた。

17時20分。コピーが終了した資料を取りにいき、ファイルに綴じる。

17時25分。ファイルにきれいに綴じたら、見やすいように付箋をつける。見る側への心配りだ。

17時28分。書類を部長に提出。

17時30分。お迎えのため、退社。嵐のように、職場を去りたくないのに、さりげなく去る。

お疲れさまですの挨拶はしっかりするけれど、あからさまに子どものお迎えでバタバタしてオーラは出さない。余裕のオーラを放っておかないと、時間がないと思われて、仕事が回ってこなくなる。

退社をしてから保育園に行くまでの道のりは、ほっと一息つく時間だ。息子のお迎えにいったら、保育園での出来事を聞いたり、夕ご飯を作ったり、また怒濤の時間がやってくる。

夕焼けに染まる空を見ていると、すっかり日が長くなったと感じる。息子を保育園に入れる前は17時30分なんて、すでに薄暗かったはずだ。

家についてからは、まず洗濯機を回す。一番に回して、夜中に干すため。夕ご飯は週末に作った作り置きと、宅配で定期的が届くお惣菜セットを用意。ごはんは朝にセットしてあったものがちょうど炊けている。

ここまで完璧な流れを組んでいても、その流れ通りにはなかなかいかない。今日は調子がいいな、なんて思っていたら、奥で何かが大に崩れる音がした。

火は消して、慌てて息子のおもちゃコーナーを見に行くと、リモコンにつまづいた息子が、自分のおもちゃ箱に頭から突っ込んでいた。

泣き叫ぶ息子。

床にリモコンを置いたのは多分、夫。昨日、注意したのに、なんて無駄な感情は置いておく。起きてしまったものはしょうがない。

「大丈夫？ よしよし、えらいねーつよいねー」

泣き叫ぶ息子をあやしながら、キッチンに戻ったり、おもちゃコーナーに行ったり。

だんだん息子が泣き止んできた頃に、夫が帰ってきた。

「ただいまー」

リモコンを置きっぱなしにしていた夫に対して、1ミリの怨念が生えかけつつも、すぐに息子の元にやってきて、さらに笑顔になる息子を見て、怨念は消えた。

ここからは夫にバトンタッチ。

家事にも子育てにも協力的な夫だと思う。

でも、やはりどうしても気がつかない部分が多いし、なぜそうなった、と突っ込まざるを

得ない状況は多々生まれる。

この、いい夫だなあと思うときと、「なんでよ！」って思うときとが交差して、最近の私の心は忙しい。

私にニキビができたのは4月の中旬だった。

はじめにできたのはおでこだった。おでこなんて中学生ぶりくらいだったから、変な出来物じゃないか、慌てて検索した。おでこニキビは睡眠不足からできたりもするらしい。ちょうど、職場に復帰して、さらに息子の保育園通いが始まって、疲れに対する睡眠時間が足りていないんだろうな、と思った。職場は幸い産休前とほとんど同じ環境で、仕事内容にも大きな変化はないのだが、息子の送り迎えで早く切り上げる分、コンプライアンスに問題がない、細かな仕事を家に持ち込むことがあった。

ゴールデンウィーク前には頬にもニキビができた。

仕事の持ち帰り量は減ってきたが、家の中が荒れ始めた頃だった。

お掃除ロボット、食洗機、人類の進歩を多用させてもらってはいるものの、やはり家事をしっかりとやろうと思うとなかなか全部はやりきれない。

夫も一生懸命やってくれているのだが、中途半端に終わっていたりすることもある。

そして最近、洗濯物はなかなかたためず、お掃除ロボットを稼働させるにもやっとの状態が続いていた。おでこにも頬にも、ぽちぽちとニキビができています。化粧でごまかすのにも時間がかかるし、はやく治したい。

僕が家に帰ると、息子の目には涙の跡があった。泣いたばかりなのだろうか。おもちゃコーナーをみると、息子のおもちゃ箱は盛大に倒れて、おもちゃは散らばっている。その手前には、リモコン。

しまった。

またやってしまった。昨日結衣に注意されたばかりだったのに。
朝、床にリモコンを置いて、その後の記憶がないことを思い出す。

気をつけよう、と思っているのにやってしまう。

仕事ではそんなこと滅多にないのに、家だと気が抜けて、どうも結衣に、息子に迷惑をかけてしまう。

今、結衣に謝るのは逆効果だ。怒った結衣に、さらに息子は泣いてしまうだろう。前に一度、失敗した。

そんな反省を踏まえて、今日はまず息子をかわいがる。僕が息子をなだめる。その間に結衣が、やりたいことをやらせよう。多分、夕飯の支度の途中だったはずだ。

息子を抱きかかえて、笑顔で高い高いをする。息子が笑って、結衣も少し笑った。

結衣にニキビができていた。はじめはおでこにちょこっと。

春から息子が保育園に通うという新しい生活スタイルが誕生したことに加えて、結衣は職場復帰も果たしている。

環境の変化が合ったから、体にも変化が出ているのかもしれない。

しばらくすれば、治るだろうと思っていた。

しかし、そのニキビが消える前に、頬にもニキビができた。

おでこ頬にぽつぽつとできたニキビは、肌が白いせいか、目立つ。

しばらくすれば治る、どころか増えてしまった。

ケアをきちんとしているであろう結衣がニキビができたのなんて、付き合っている時は何度かあった気がするけど、結婚後では記憶にない。

おでこニキビと頬ニキビについて調べていると、どうやら原因はストレスらしいことがわかった。

最近、部屋も荒れている。部屋はその人の心の現れ、とか言ったりするが、多分結衣の心には今、かなり余裕がない。

かといって、自分に余裕がたくさんあるわけではないし、洗濯物を下手にたたんで結衣の仕事を増やしたくもない。これも前に一度、失敗している。

何か、できることはないか、と息子をあやしながらスマホを見る。もう仕事のメールはない。

SNS のメッセージも確認して、閉じようとした時、目に床クリーナーの紹介が飛び込んできた。

「掃除機、お掃除ロボット、の後に一手間加えるだけで、ピカピカの床に！ 天然由来成分だけを使ったワックス」

確かに、掃除機や、お掃除ロボットはゴミを取るけれど、床のつや出しまではしてくれない。

そもそも床のつや出しなんて年末くらいしかやらない。我が家の床も、大掃除をした日から、1月、2月くらいまでは、床は輝きを放っていたが、今その面影はない。

それに、ちいさい子どもがいても使えるクリーナーは嬉しい。

ネットでさっと注文して、最寄り駅のロッカーに届くようにする。

2日後の帰り道には、駅のロッカーから取り出すことができた。平日の日中、家にいられない夫婦共働きにこのシステムはとても助かる。

帰宅すると、床はさらに荒れていた。息子が食べこぼしたものを一生懸命片付ける結衣をみて、慌てて手伝った。

僕が片付け始めると、結衣は息子の様子を見に行った。結衣は笑顔で息子と食事を続けた。自分が作ったものをこぼされても、僕がなかなか帰らなくて1人で対応している最中も、イライラを息子にぶつけない結衣の姿に、自分が情けないような、力になれていないような、惨めな気持ちになった。

休みの日がやってくると、少しほっとする。朝は平日に比べると落ち着いているし、ちいさい息子には毎日予想外のことが起きるのだが、仕事がない分、対応も余裕をもってすることができる。

洗濯物を畳んで、息子のおもちゃを片付けて、床が見えた頃にお掃除ロボットを稼働させる。息子の面倒をみながら、公園へのお出かけ準備を整える。

いつもなら、息子とおもちゃで遊びながら待つのだが、昨晚一緒にはしゃいで遊んだせいか、今日の息子は朝ご飯の後再び寝てしまっていた。

隙をみて、雑巾に昨日買ってきたエコクリーナーを染み込ませ、床磨きを始めた。床を

磨く目線になると、自然と息子のことも見えやすい。床磨きだけに夢中になりすぎず、息子をみながら磨いていく。驚くほど床はピカピカしてきた。これはなかなか楽しい。自分が夢中になりすぎないように気をつける。きれいになるのが楽しくて、気がつけば、フローリングの掃除が終わっていた。

「準備ができたよー」

結衣がお弁当をつめ終わったようだ。

「じゃあこっちも準備しまーす」

息子をそっとベビーカーに乗せて、結衣を待つ。

着替えやお弁当を持ってきた結衣が、フローリングの部屋をみて、「あっ」と声を出した。

お掃除ロボットではだせないつやがフローリングにでている。天気がいいことも手伝って、新居の時のようにピカピカに光って見えた。

僕はすかさず一言付け加える。

「ちいさい子がいても安心の、天然由来成分だけが入ったやつだから大丈夫だよ」

結衣の顔は笑顔のまま、目は潤んでいた。喜んでくれているようだ。

そして僕たちは天気の良い公園に出かけた。

それから二月に一度、床を磨くことが僕の習慣になった。食べこぼしやらなにやらで汚れがちな床が、二月に一度でも磨くとつやが続いてくれる。洗濯物が床に散乱しても、ちょっと片付けた隙き間からピカピカの床がのぞくととても気分がいい。

ピカピカの床にしたいから、リモコンも置かなくなった。息子は元気に、安全に家の中を駆け回っている。

結衣のおでこと頬のニキビもなくなった。妻がキレイでいてくれることは、床がきれいなことより僕にとっては嬉しいことだ。もちろん僕は、そんなところは磨いていない。

(了)